

2014年2月22日

神戸国際大学経済文化研究所 主催

第29回プロジェクトXIX 公開土曜講座

「死を見つめる心～死んだらどうなるのか～」

『「天地の間」という自然観：遺体から遺伝子まで』

金光教泉尾教会 総長

神道国際学会 理事長

三宅善信

1. 神話の比較：ギルガメッシュとスサノヲ

1.1 フンババの森：『ギルガメッシュ叙事詩』に見られる森林伐採の記録

- ・人類最古の文献資料といわれる『ギルガメッシュ叙事詩』において；ウルクの王ギルガメッシュが英雄エンキドゥを伴い、森の神フンババの守る神聖な森に立ち入り、青銅の手斧をもって美しきレバノン杉を切り倒し、メソポタミアに最古の都市国家を立てた。その後、森林は堰を切ったように農耕文明によって畑地となり、牧畜文明によって草原となり、都市文明によって建築材となり、科学文明により精練の燃料となって、次第に姿を消していった。
- ・レバノン杉によって造られたもの→ノア方舟、ピラミッドの基礎、ファラオの棺、ギリシャ・ローマの神殿の屋根等
- ・ギルガメッシュ叙事詩→旧約聖書→ユダヤ教・キリスト教・イスラム教に影響
- ・森林伐採→保水力の低下→大洪水や砂漠化

1.2 『日本書紀』にみられるスサノヲ(素戔嗚尊)一家の植林

- ・『日本書紀』によると；素戔嗚尊はその子五十猛命を伴い、新羅のソシモリに天降った。しかし、「この国にはいたくない」と言って、出雲の鳥上の峯に降臨し、「韓郷の島には金銀がある。もしわが子の治める国(日本)に、舟がなかったらよくないだろう」と言って、鬢を抜いて杉、胸毛から檜、尻毛から槨、眉毛を樟となしたとある。素戔嗚尊は木々の用途として「杉と樟は船、檜は宮、槨は寝棺を造るのに良い。そのために木種を播こう」と言って、その子の五十猛神、大屋都比売、都麻都比売の三柱の神がよく木種を播いた五十猛神は「紀伊の国に祀りしてある」と記載され

ている。

- ・日本はフィンランド・カナダと並ぶ世界一の森林国（国土の3分の2が森林）
- ・スサノヲの高天原追放の理由→農耕妨害の罪：縄文(スサノヲ)VS 弥生(アマテラス)

1.3 『もののけ姫』にみられるシシ神の森と見慣れた森の関係

- ・『ギルガメッシュ叙事詩』をプロットにしながら、これを宮崎駿が日本的に解釈。山狗に育てられた野生児サンに守られるシシ神の森の木々を伐採することによってタタラ場(製鉄工場)を経営するエボシ御前一党との戦いを描いた映画。
- ・シシ神を殺すことによって一度破壊されてしまった原生林(もののけの跋扈する恐ろしい森)は、この映画のラストで、生と死を司るシシ神の最後の力によって蘇り始め再び新しい森の生命が芽生える。しかし、その時にサンが口にする言葉は「甦っても、ここはもうシシ神の森じゃない。シシ神様は死んでしまった」であり、文字通り、もはやそれは、われわれが見慣れた穏やかな恐ろしくない森になってしまった。

2. 天地を繋ぐ柱：三内丸山遺跡と諏訪大社御柱祭

2.1 カミと柱：三内丸山遺跡の巨大列柱跡が意味するもの

- ・5,500年前から4,000年前にかけて、青森県の三内丸山に縄文文化が花開く。1,500年間にわたる繁栄をその後の日本史に置き換えると、聖徳太子から現代までという長期間、一箇所に定住。山林の再生なしにはあり得ない。
- ・何本か並んだ柱の跡を見ると、現代人は「建造物」を想起するが、実は、「柱を立てること」そのものが重要であった。カミを数える数詞→「一柱、二柱…」と呼ぶ。
『神道と柱』(1998年 www.relnet.co.jp/relnet/brief/r12-0.htm)

2.2 天地を繋ぐ柱：諏訪大社の御柱祭

- ・『説文解字』によると、「工」は「天と地を繋ぐ柱」という意味。
- ・『諏方大明神画詞』(1356年)によると、建御名方神の末裔諏訪氏は、日本最古の神社と言われる大和の大神(おおみわ)神社の神(みわ)氏と同族である。その『画詞』に「御柱は桓武天皇の時代に始まる」というふうに書かれている。そこには既に、「寅申の干支に当社造営あり」と書かれてある。現在でも、御柱祭は寅と申の干支の年に行われるので、既に200回の回数を重ねてきたことになる。
- ・この奇祭のエネルギーは凄まじい。6年に1度、山の中から8本の縦の巨木を切り出

して来、何千人もの男たちによって何十 km も曳きずられ、最後に、諏訪大社の境内の定められた位置に突き立てられる。→縄文時代以来の「柱」信仰のなごり。

- ・諏訪という土地→蝦夷の世界への入口。天孫族に出雲を追われた出雲族が、若狭・近江・美濃を經由して信濃に侵入。先住民(縄文系)を追い出す。出雲において破れた先住民出雲族が出雲大社に祀られたように、諏訪においては先住民守矢族が諏訪大社に祀られた。平安初期に「日本」の版図を拡げた桓武天皇政権の坂上田村麻呂は、この諏訪を拠点に、蝦夷(縄文系)の土地であった「陸奥」への侵攻を図った。『東山道:もうひとつの「国譲り」』(2001年 www.relnet.co.jp/relnet/brief/r12-86.htm)

3 有限の世界認識:「見える範囲」が世界

3.1 表音文字的世界認識と表意文字的世界認識

- ・北東アジア人の世界認識は、Abrahamic な世界観、Hellenistic な世界観、Indian な世界観と異なって、観念論ではなく具体的である。セム系およびインド・ヨーロッパ系の言語は表音文字。一方、漢字は表意文字。「はじめに言葉ありき」はナンセンスで、「はじめにモノありき」である。『Mono: It exists in the Japanese deep awareness.』(1998年 www.relnet.co.jp/relnet/brief/r12-22.htm)
- ・「世界」は有限で、目で見える(具体的な知覚)範囲内にある。アリストテレスやスコラ的(観念的)世界観や、「須弥山」や「西方十萬億土」といった世界観はない。

3.2 すべては「天地の間」にある

- ・先祖の靈魂は「草葉の陰」にいる。「魂魄この世に留まりて」→「鬼」という旁(つくり)は「鬼籍にいる」の「鬼」で、死体(遺骨)を現し、「云(うんぬん)」という偏(へん)は、「雲」の下部と同じで、そこらへんにフワフワ浮いているものの意味。
- ・仏壇の線香や神棚の燈明。五山(大文字)送り火→空港の夜間着陸用誘導灯や Beacon。
- ・「天橋立」→かつて、伊弉諾尊(イザナギ)が、高天原と地上世界を行き来するのに用いていた梯子段。イザナギが昼寝している間に倒れてしまい、それが「天橋立」になった。天橋立の端から端までたった 3.2km(2 miles)しかない。海拔 3,776m の富士山などは、まさに「靈峰」といえる。→山岳仏教や修験道
- ・人間(ヒト)も靈魂(タマ)もモノも、神仏もすべて「天地の間(この世)」に住む。

4. 自然の再生力を信じる：中臣の大祓詞

4.1 自然循環の回転が速い日本の風土

- ・地震・噴火・台風などの自然災害の多い日本では、堅固な構造物を建造することに執着しなかった。縄文人以後、1 万年以上もこのような自然環境下(「破壊と再生」の回転が速い)で生活する「日本人」の意識に風土が与えた影響は大きい。
→パルテノン神殿 VS 伊勢の神宮。ドイツのミツバチの営巣 VS 日本のミツバチの営巣。

4.2 「消費」の意味：animistic な価値と経済的 value の違い

- ・消費の文字どおりの意味は「消えて費えること」であるが、物質的には決して「消えて費え」ていない(「creatio ex nihilo」の逆は不可能)。ゴミになっているだけである。われわれの「生活」という行為は、生産や流通によって価値を付与された物(製品)から、「その物が持っていた付加価値を消費した」だけのことであって、決して、「物質それ自体が消滅した」訳ではない。ここに、物本来が有する「モノ(animistic な価値)」と人間によって物に付加された価値(value)との違いがある。モノはなくならないが、価値は常に減少する。→仏教の「供養」概念と合体。e.g. 針供養。

4.3 自然の再生力に期待する日本人

- ・廃棄物がこの地球上から「消えて無くなる」なんてことは不可能であることは解っていないながら、一刻も早く自分の目の前からは「消えて無くなって」ほしいと願う。日本人は、そのことによって自分のゴミ(自分にとって都合の悪いこと)が「消えて無くなった」と信じたいのである。『速佐須良比賣(はやさすらひめ)のお仕事』(2000年 www.relnet.co.jp/relnet/brief/r12-56.htm)
- ・『中臣大祓詞』によると；「…(前略)…祓(はら)へ給(たま)ひ清め給ふ事を 高山の末 短山(ひきやま)の末より 佐久那太理(さくなだり)に落ち多岐(たぎ)つ。速川(はやかわ)の瀬に坐(ま)す瀬織津比賣(せおりつひめ)と言ふ神 大海原に持ち出(い)でなむ。此く持ち出で往(い)なば 荒潮の潮の八百道(やほち)の八潮道(やしほち)の潮の八百會(やほあひ)に坐す速開都比賣(はやあきつひめ)と言ふ神 持ち加加吞(かかの)みてむ。此く加加吞みてば 氣吹戸(いぶきど)に坐す氣吹戸主(いぶきどぬし)と言ふ神 根国(ねのくに)底国(そのくに)に息吹(いぶき)放(はな)ちてむ。此く息吹放ちてば 根国底国に坐す速佐須良比賣(はやさすらひめ)と言ふ神 持ち佐須良(さすら)ひ失(ひ)てむ。此く佐須良(さすら)ひ失(ひ)てば 罪と言ふ罪は在(あ)らじと祓へ給ひ清め給ふ事を 天つ神 国つ神 八百萬神等(やほよろづのかみたち)共に聞こし食(め)せと白(ま)をす。」

5. 人間の身体にまつわる二重性：実存と所有

5.1 「ものにする」身体と「既にそこにある」身体

- ・ 身体には、1)「私は私の身体である」という実存的意味合いと、2)「私は私の身体を持っている」という所有のプロトタイプの意味合いがある。この後者の意味からは、身体的所有者として、形而上学的自己が仮設されてしまうことになり、この形而上学的自己が、身体を含めた自然の上に君臨し、自然の征服を始めるようになる。しかし、あらゆる人間は、身体として生まれる。こうした意味で、「私は私の身体である」。それ以外の存在の仕方はできない。身体として生まれてしまった後で、その身体を「ものにして」いかなければならない。生まれた後、赤ん坊は、自分の身体の機能を発見していかなければならない。
- ・ 実存的身体は、「意味付け以前の先行性」として現われる。つまり、身体は先ず、「物にする」前に、つまり「所有する」前に、もう既にあるものなのである。私が私の身体を所有する前に、もう既に私は身体として生まれてしまっている。

5.2 自然によって「生かされている」身体

- ・ 身体の二重性の意味合いについて、自然との関連で大切なことは、「身体の実存的意味合い」のほうである。人間は身体を意味の秩序に組み込んで「物にして」生きているが、身体は実存的意味合いにおいて、「意味付け以前の先行性」として存在している。つまり「意味付け以前に身体は生存を始めてしまっている」のである。
- ・ 自然との交流を通して人間に開けてくる次元とは、まさに「意味付け以前の先行性」としての身体の次元である。自然に接するとき、「ああ、自然によって生かされている」と感じる。この「生かされている」という「受身」で表現せざるを得ないような次元が大切。
- ・ 『もののけ姫』における人間にとって「恐ろしい」シシ神の森と、再生後の「穏やかな」森の違い。

6. 遺体と遺伝子：いのちの乗り物

6.1 「遺体」：先祖から受け継いだ預かりもの身体

- ・「孝」は、儒教の基本理念である。「身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝のはじめなり」という言葉があるように、「孝」は現存する両親に対する「親孝行」だけでなく、「先祖を祀り、子孫を絶やさない」ことこそが最大の「孝」である。
- ・預かったものは、また、無傷で返却しなければならない。e.g. 賃貸マンションの返却時の現状復帰。天理教の「かしまのかりもの」の理。

6.2 「遺伝子」：先祖から受け継いだ預かりもの身体

- ・地球上に生命が発生して以来 38 億年間絶えることなく続いてきた生命の営み→DNAの自己複製。「進化」は「新化」であって、価値観を含むものではない。ヒトもバクテリアも、同じ時間をかけて、最初の生命から進化したのであって、優劣を論ずる対象ではない。
- ・『Planet of the Apes』の矛盾→自己の存在の意味を問う存在が人間である。「Imago Dei」にこだわるから、見た目がサル的人間的存在よりも、見た目がヒトの猿的存在のほうを重んじてしまう。e.g. 『ガリバー旅行記』の『フウイヌム国渡航記(A Voyage to the Country of the Houyhnhnms)』の馬の姿をした Houyhnhnms と家畜人 Yahoo。

6.3 可処分でない自分のいのちと身体

- ・上記の考察から、当然のことながら、人間の身体が個人(故人)の所有物でない以上、いい加減に処分することは許されない。
- ・天皇制の下、市民平等化した明治期に最大化(見える化)した葬儀。→大規模な葬列。都市化・交通機関の発達した大正期に発明された霊柩車。→葬列の衰退。
「死」が隠されるようになったポストモダン。霊柩車まで不可視化。
家族葬は「孝」と言えるのか？

結語：縄文からポケモンまで

自然の力を畏れ祀った縄文人からポケモンを楽しむ現代の子供まで、日本人に共通するアニミズム的世界観を抜きにした観念論だけでは、少なくとも、この国においては、リアリティを有したエコロジカルな宗教倫理を論じることはできない。